

槐

かい

岡井省二創刊

平成21年10月号

平成二十一年十月一日発行 第十九卷第十号
平成二十三年九月十八日第三種郵便物認可
通巻第三二〇号 (毎月一回一日発行)



影

高橋将夫

草笛の吾が音となつてきたりけり
涼風を呼び込む殺陣の流れかな
浴衣着てめりはりのある口調かな
噴水が風を指揮してをりにけり

ほ
ど
ほ
ど
の
欲
と
悟
り
や
奈
良
晒
布

心
字
池
狐
の
提
灯
と
も
り
ぬ
し

蝙
蝠
を
つ
れ
て
日
暮
は
や
つ
て
く
る

明
暗
と
陰
陽
の
濃
き
夏
野
か
な

百
日
草
千
日
草
も
刹
那
か
な

振
花
の
素
直
な
影
で
あ
り
に
け
り

影
あ
り
て
草
蜉
蝓
の
存
在
す

槐安集

水野恒彦

夢のはじめも夢の終りも杜若
鬼百合に触れて暦日汚したり
還らざる放縦の日日泉鳴る
惜別やあしたは白きさるすべり
街騒を裏路にさけ巴里祭

延広禎一

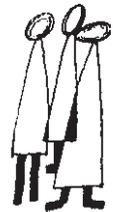
真髓は弘法茄子の種にあり
朱夏の寺風信帖と増長天
愛染^{あいぜん}祭^{まつり}べつ^{べつ}つ^つぴ^ぴん^んさん^{さん}と^と蛸^{たか}焼^{やき}と
陽の気と生^{うぶ}の心や青葉木菟
風圧を感じずる大人^{おとな}と夏座敷

加藤みき

入道雲足跡におく足の影
落し文のころがつてゐる天保山
炎昼の燧道の壁濡れてをり
点りたるあかりの中の端居かな
炎天下石もて滅菌してゐたる

石脇みはる

山法師ケーブルカーに客二人
黄菅野の中機関車の通りけり
夏旺んハイビスカスの黄を愛す
汀^{つら}まで蔓伸び土用波高し
楳の大樹に触るる夜の秋



中島陽華

浮く雲はアピスか夏の祝賀会
隠れみの葉流れつき浮巢かな
炎天の日のモザイクのマリア像
稲荷道抜けてかつ節冷奴
夏鶯長髓彦のはなしかな

竹内悦子

宇宙より見られてゐたる月見草
苦瓜の置きどころなき机かな
地球まだ濡れてゐるひまはりの花
かげろふや紙の袋にがんもどき
鯰とびしあとの水輪や大没日

栗栖恵通子

繁二郎の馬に鞍置く青月夜
半夏生早良王墓に石ひとつ
梅雨穴や定規で○を描ひてをり
扇骨にあはひありけり出羽三山
盆道の真赤な毬を追うてをる

大島翠木

大章魚の愁ひを吊す巴里祭
クリムトや虹きりきりと川跨ぐ
蟻走る誰彼遠くなりしかな
日雷何も持たずに歩きけり
梅雨明くる万年筆の青き文字

雨村敏子

日蝕の翳りはじめし噴井かな
カサブランカエヴァの匂ひと思ひける
虹の根に魚が飛ぶよ草田男忌
白昼夢夾竹桃の黙しかな
形代をのせ水の輪の流さるる

本多俊子

くらやみに五感をもどすかたつむり
言霊をつつむ海霧かいむの深さかな
天づたふ水鶏の声でありにけり
萍にうくといふ魂ありにけり
ゆく夏にアクアマリンの日輪よ

小形さとる

船涼み手を振るひとに手をふつて
縞蛇と行け遊び半分で行け
いつまでも梅雨のあがらぬ眉根かな
口にしてその気失せたる杏の実
鬼の児のおのれ吹き消す木下闇

久津見風牛

ががんぼの障子叩きやまだやめず
知らぬ顔して種とばすはちすかな
腹の虫落鮎釣りに行くつもり
たいがいにあきらめ戻る蟻のぬて
老い易き月を仰ぐや白緋

近藤 きくえ

心眼で石庭みつむ土用かな
蒼天と向日葵われも前向きに
幾万の御霊おはせり佛桑花
茅の輪くぐり心あらはる夕べかな
山法師行者堂には誰もみず

近藤 喜子

夢ひそと描きてゆけり雲母虫
遠き日を語る遠き目ほしまつり
夏雲や海神あをき身を伸ばす
蟬しぐれ少年の森かがやきぬ
炎天や娑伽羅竜王どこにゐる

谷村 幸子

草祝『真髓』の露の心に触れて梶の道
棉咲くやむかし庄屋の蔵の前
休日や家族で吊つて釣忍
葛切をさし入れられし写経かな
先斗町に風のおそびて夏のれん

瀬川 公馨

某か梅雨の髓に髓に某か
パリ祭の獄に格子なかりけり
天敵や外寝の猫を呼びもどす
炎昼や影を売りたる男ぬし
八十路かしらん守宮の皺を鑑定す

槐市集

杉原ツタ子

酒蔵を覗く声あり行々子
虎の尾や朱き山門風の径
合歓の花少女の頃の通学路
足摺の風の強さや椿の実
底紅や出船入船水の面

鈴木勢津子

振り仰ぐ梅雨空よぎる幻燈絵
虚空にて威光放ちぬ霹靂神
暑気中り「日々が大事」と医者曰く
ワニガメはペットにならずパリー祭
夏蝶は雲に触れゐて雨こぼす

庄司久美子

偉丈夫な僧ひざまづく梅雨の明け
顎を引き蛇の行方をみてをりぬ
凌霄やあやかしの術すうと消ゆ
訝しげな二匹の蜥蜴石舞台
三代目の魚柳叩く蟬時雨

十川たかし

七夕の笹流れくる橋の下
梅雨きこの帽子の縁がひらひらす
斑猫にしばらくついて登りけり
夕焼の岬に丸き鯨墓
われもまた身ほとりの書を曝しけり



槐集

高橋将夫選

雲海や我ら雲中菩薩なる
枚方 富松 寛子

人間を笑うてゆくよ■(魚憤)の群

絵簾や伏して甘えし日の遠く

蟬の聲水の流れの速まりぬ

閻王を前に尼僧の弥陀の聲

白南風や迦楼羅の落とすラヴレター
守口 柳川 晋

クラインの壺中の天に梅雨明くる

カヌー漕ぐ御祖^{みおや}日本へ来し如く

草刈の刈り残したる疑惑かな

土用太郎星の斗^{へんしほ}で水を飲む

勾玉に蒼き影ある夏越かな
京都 竹中 一花

玉の汗床に落とすや仕舞の子

白南風や海豚飛び入る五色の輪

牛頭の風まとうてくぐる茅の輪かな

裏鬼門表鬼門や梅雨きのこ

青蘆の根に豊かなる息遣ひ
摂津 中田 禎子

赤鬼の顔を出したり雲の峰

日輪の月に喰はるる鱧の皮

七月の黒き太陽砂の川

雲の峰ふつつ胸にたぎるもの

てのひらの万金丹の三尺寝
東京 西村 純太

供へたる彼の世にはなき鮓と酒

曼荼羅をつきつけられて炎暑かな

しづかさは郭公にあり人にあり

七日にて渾沌死せり雲の峰

山滴り肺ひしひしと青みたる
岡崎 岩月優美子

いかづちに能面の眉吊り上がる

雨に濡れゐて沈黙の合歓の花

B面の己を試すサングラス

炎昼の鏡の中の他人かな

銀河往来 高橋将夫

雲海や我ら雲中菩薩なる 富松 寛子
平等院鳳凰堂母屋の内壁に五二体の菩薩像が懸け並べられている。それぞれ飛雲に乗って楽器を奏でたり、合唱している。雲中菩薩である。雲海を見て作者は雲中菩薩を想起した。やがて自らもその中に入り、ふと気がつくと、皆も周りにいる。「我ら雲中菩薩」なのだ。「槐」の世界なのだ。

土用太郎星の斗ひしゃくで水を飲む 柳川 晋
土用太郎は土用の一日目。これを擬人化して「北斗七星を柄杓として水を飲む」と雄大に表現した。陰陽五行説の「土克水」を踏まえているのだろうが、それはともかく、土用は最も暑いころだけに太郎もよほど水が飲みたかったのだろう。

くラインの壺中の天に梅雨明くる 晋
牛頭の風まとうてくぐる茅の輪かな 竹中 一花
京都祇園社（八坂神社）などに祀られている牛頭天王は除疫神とされている。そんな牛頭天王の息吹をまとうて茅の輪をくぐったら、それこそ恐いものなといったところ。

日輪の月に喰はるる鱧の皮 中田 禎子
先日、皆既日食があった。太陽が月に喰はれるようだと思いがらそれを見ていたのだろう。「鱧の皮」がその時の気持ちを暗示しているようで面白い。

てのひらに万金丹の三尺寝 西村 純太
職人や大工が仕事場で短時間寝るのが三尺寝。てのひらの万金丹は夏バテへの供えか。備えあれば愁いなし。万金丹がなんともユーモラスで、俳諧。

B面の己を試すサングラス 岩月優美子
サングラスをかけると、いつもの自分とどこか違う気がしてくる。作者によれば、サングラスをかけるとA面の裏になっているB面の自分が出せるらしい。

かたつむり小さき孤身をもちあるき 近藤 公子
蝸牛が殻を背負ってあゆんでいる。我とわが身を一身に背負っているのだ。どこへ行くのも自由。

祝「真髓」上梓
万緑の真髓なりし流れかな 中野 京子
万緑の中の一筋の清流。これこそ万緑のエッセンスに違いないと清流を見つめる作者の姿が目につかぶ。

今年竹成層圏まで伸びゆくか 近藤 紀子
竹が成層圏まで伸びることは有り得ないが、それにしても、元気に伸びてゆく若竹は見ていて気がいい。

シャガールの宙へ六月の花嫁 谷岡 尚美
ジュンブライド（六月の花嫁）に結婚した花嫁は幸せになるという。「六月の花嫁」に違いないと思いつながら、シャガールの宙に浮く花嫁の絵を見ている作者のやさしい眼差しを感じる。
(以下略)